

## 第 21 章

「言語道断……あろうことか……誰も死ななかったのは奇跡だ……こんなことは前代未聞……いや、まったく、スネイプ、君が居合わせたのは幸運だった」

「恐れ入ります、大臣閣下」

「マーリン勲章、勲二等、いや、もしわたしが口やかましく言えば、勲一等ものだ」

「まことにありがたいことです、閣下」

「ひどい切り傷があるねえ……ブラックの仕業、だろうな？」

「実は、ポッター、ウィーズリー、グレンジャーの仕業です、閣下……」

「まさか！」

「ブラックが三人に魔法をかけたのです。我輩にはすぐわかりました。三人の行動から察しますに、錯乱の呪文でしょうな。三人はブラックが無実である可能性があると考えていたようです。三人の行動に責任はありません。しかしながら、三人がよけいなことをしたため、ブラックを取り逃がしたかもしれないわけでありまして……三人は明らかに、自分たちだけでブラックを捕まえようと思ったわけですね。この三人は、これまでもいろいろとうまくやり遂げておりまして……どうも自分たちの力を過信している節があるようで……それに、もちろん、ポッターの場合、校長が特別扱いで、相当な自由を許してきましたし——」

「ああ、それは、スネイプ……なにしろ、ハリー・ポッターだ……我々はみな、この子に関しては多少甘いところがある」

「しかし、それにしましても——あまりの特別扱いは本人のためにならぬのでは——我輩、個人的には、ほかの生徒と同じように扱うよう心がけておきます。そこですが、ほかの生徒であれば、停学でしょうなく少なくとも——友人をあれほどの危険に巻き込んだのですから。閣下、お考えください。校則のすべてに違反し、しかもポッ

## Chapter 21

### Hermione's Secret

“Shocking business ... shocking ... miracle none of them died ... never heard the like ... by thunder, it was lucky you were there, Snape. ...”

“Thank you, Minister.”

“Order of Merlin, Second Class, I'd say. First Class, if I can wangle it!”

“Thank you very much indeed, Minister.”

“Nasty cut you've got there. ... Black's work, I suppose?”

“As a matter of fact, it was Potter, Weasley, and Granger, Minister. ...”

“No!”

“Black had bewitched them, I saw it immediately. A Confundus Charm, to judge by their behavior. They seemed to think there was a possibility he was innocent. They weren't responsible for their actions. On the other hand, their interference might have permitted Black to escape. ... They obviously thought they were going to catch Black single-handed. They've got away with a great deal before now. ... I'm afraid it's given them a rather high opinion of themselves ... and of course Potter has always been allowed an extraordinary amount of license by the headmaster —”

“Ah, well, Snape ... Harry Potter, you know ... we've all got a bit of a blind spot where

ターを護るために、あれだけの警戒措置が取られたにもかかわらずですぞー規則を破り、夜間、人狼や殺人者と連るんでーそれに、ポッターは、規則を犯して、ホグズミードに出入りしていたと信じるに足る証拠を我輩はつかんでおりますー」

「まあまあースネイプ、いずれそのうち、またそのうち……あの子はたしかに愚かではあった……」

ハリーは目をしっかり閉じ、横になったまま聞いていた。なんだかとてつらかった。聞いている言葉が、耳から脳に、ノロノロと移動するような感じで、なかなか理解できなかった。手足が鉛のようだった。まぶたが重くて開けられない……ここに横たわっていたい。

この心地よいベッドに、いつまでも……。

「一番驚かされたのが、吸魂鬼の行動だよ……どうして退却したのか、君、ほんとうに思い当たる節はないのかね、スネイプ？」

「ありません、閣下。我輩の意識が戻ったときには、吸魂鬼は全員、それぞれの持ち場に向かって校門に戻るところでした……」

「不思議千万だ。しかも、ブラックも、ハリーも、それにあの女の子もー」

「全員、我輩が追いついたときには意識不明でした。我輩は当然、ブラックを縛り上げ、さるぐつわを噛ませ、担架を作り出して、全員をまっすぐ城まで連れてきました」

しばし会話が途切れた。

ハリーの頭は少し速く回転するようになった。

それと同時に、胸の奥が、ざわめいた。ハリーは目を開けた。何もかもぼんやりしていた。

誰かがハリーのメガネをはずしたのだ。ハリーは暗い病室に横たわっていた。

部屋の一番端に、校医のマダム・ボンフリ

he's concerned.”

“And yet — is it good for him to be given so much special treatment? Personally, I try and treat him like any other student. And any other student would be suspended — at the very least — for leading his friends into such danger. Consider, Minister — against all school rules — after all the precautions put in place for his protection — out-of-bounds, at night, consorting with a werewolf and a murderer — and I have reason to believe he has been visiting Hogsmeade illegally too —”

“Well, well ... we shall see, Snape, we shall see. ... The boy has undoubtedly been foolish. ...”

Harry lay listening with his eyes tight shut. He felt very groggy. The words he was hearing seemed to be traveling very slowly from his ears to his brain, so that it was difficult to understand. ... His limbs felt like lead; his eyelids too heavy to lift. ... He wanted to lie here, on this comfortable bed, forever. ...

“What amazes me most is the behavior of the dementors ... you've really no idea what made them retreat, Snape?”

“No, Minister ... by the time I had come 'round they were heading back to their positions at the entrances. ...”

“Extraordinary. And yet Black, and Harry, and the girl —”

“All unconscious by the time I reached them. I bound and gagged Black, naturally, conjured

ーがこちらに背中を向けてベッドの上にかがみ込んでいるのがやっと見えた。ハリーは目を細めた。

ロンの赤毛がマダム・ボンフリーの腕の下に垣間見えた。

ハリーは枕の上で頭を動かした。

右側のベッドにハーマイオニーが寝ていた。

月光がそのベッドを照らしている。ハーマイオニーも目を開けていた。緊張で張りつめているようだった。ハリーも目を覚ましているのに気づいたハーマイオニーは、唇に人差し指を当て、それから病室のドアを指差した。

廊下にいるコーネリウス・ファッジとスネイプの声が、半開きになったドアから入り込んでいた。

マダム・ボンフリーが、キビキビと暗い病室を歩き、今度はハリーのベッドにやってくる。

ハリーは寝返りを打ってそちらを見た。

マダム・ボンフリーはハリーが見たこともないような大きなチョコレートを一塊手にしていた。ちょっとした小岩のようだ。

「おや、目が覚めたんですか！」

キビキビした声だ。チョコレートをハリーのベッドわきの小机に置き、マダム・ボンフリーはそれを小さいハンマーで細かく砕きはじめた。

「ロンは、どうですか？」ハリーとハーマイオニーが同時に聞いた。

「死ぬことはありません」マダム・ボンフリーは深刻な表情で言った。

「あなたたち二人は……ここに入院です。わたしが大丈夫だというまでーポッター、何をしてるんですか？」

ハリーは上半身を起こし、メガネをかけ、杖を取り上げていた。

「校長先生にお目にかかるんです」ハリーが言った。

stretchers, and brought them all straight back to the castle.”

There was a pause. Harry’s brain seemed to be moving a little faster, and as it did, a gnawing sensation grew in the pit of his stomach. ...

He opened his eyes.

Everything was slightly blurred. Somebody had removed his glasses. He was lying in the dark hospital wing. At the very end of the ward, he could make out Madam Pomfrey with her back to him, bending over a bed. Harry squinted. Ron’s red hair was visible beneath Madam Pomfrey’s arm.

Harry moved his head over on the pillow. In the bed to his right lay Hermione. Moonlight was falling across her bed. Her eyes were open too. She looked petrified, and when she saw that Harry was awake, pressed a finger to her lips, then pointed to the hospital wing door. It was ajar, and the voices of Cornelius Fudge and Snape were coming through it from the corridor outside.

Madam Pomfrey now came walking briskly up the dark ward to Harry’s bed. He turned to look at her. She was carrying the largest block of chocolate he had ever seen in his life. It looked like a small boulder.

“Ah, you’re awake!” she said briskly. She placed the chocolate on Harry’s bedside table and began breaking it apart with a small hammer.

“How’s Ron?” said Harry and Hermione together.

「ポッター」マダム・ボンフリーがなだめるように言った。

「大丈夫ですよ。ブラックは捕まえました。上の階に閉じ込められています。吸魂鬼が間もなく『キス』を施しますー」

「えーっ！」

ハリーはベッドから飛び降りた。

ハーマイオニーも同じだった。しかし、ハリーの叫び声が、廊下まで聞こえたらしく、つぎの瞬間、コーネリウス・ファッジとスネイプが病室に入ってきた。

「ハリー、ハリー、何事だね？」ファッジが慌てふためいて言った。

「寝てないといけないよーハリーにチョコレートをやったのかね？」

ファッジが心配そうにマダム・ボンフリーに聞いた。

「大臣、聞いてください！ シリウス・ブラックは無実です！ ピーター・ペティグリューは自分が死んだと見せかけたんです！ 今夜、ピーターを見ました！ 大臣、吸魂鬼にあれをやらせてはだめです。シリウスはー」

しかし、ファッジは微かに笑いを浮かべて首を振っている。

「ハリー、ハリー、君は混乱している。あんな恐ろしい試練を受けたのだし。横になくなさい。さあ。我々が掌握しているのだから……」

「してません！」ハリーが叫んだ。

「捕まえる人をまちがえています！」

「大臣、聞いてください。お願い」

ハーマイオニーも急いでハリーのそばに来て、ファッジを見つめ、必死に訴えた。

「私もピーターを見ました。ロンのネズミだったんです。『動物もどき』だったんです、ペティグリューは。それに、」

「おわかりでしょう、閣下？」スネイプが言った。

「錯乱の呪文です。二人とも……ブラック

“He’ll live,” said Madam Pomfrey grimly. “As for you two ... you’ll be staying here until I’m satisfied you’re — Potter, what do you think you’re doing?”

Harry was sitting up, putting his glasses back on, and picking up his wand.

“I need to see the headmaster,” he said.

“Potter,” said Madam Pomfrey soothingly, “it’s all right. They’ve got Black. He’s locked away upstairs. The dementors will be performing the kiss any moment now —”

“WHAT?”

Harry jumped up out of bed; Hermione had done the same. But his shout had been heard in the corridor outside; next second, Cornelius Fudge and Snape had entered the ward.

“Harry, Harry, what’s this?” said Fudge, looking agitated. “You should be in bed — has he had any chocolate?” he asked Madam Pomfrey anxiously.

“Minister, listen!” Harry said. “Sirius Black’s innocent! Peter Pettigrew faked his own death! We saw him tonight! You can’t let the dementors do that thing to Sirius, he’s —”

But Fudge was shaking his head with a small smile on his face.

“Harry, Harry, you’re very confused, you’ve been through a dreadful ordeal, lie back down, now, we’ve got everything under control. ...”

“YOU HAVEN’T!” Harry yelled. “YOU’VE GOT THE WRONG MAN!”

は見事に二人に術をかけたものですな…  
…」

「僕たち、錯乱してなんかいません！」  
ハリーが大声を出した。

「大臣！先生！」マダム・ボンフリーが怒った。

「二人とも出ていってください。ポッターはわたしの患者です。患者を興奮させてはなりません！」

「僕、興奮してません。何があったのか、二人に伝えようとしてるんです」

ハリーは激しい口調で言った。

「僕の言うことを聞いてさえくれたらー」

しかし、マダム・ボンフリーは突然大きなチョコレートのかたまりをハリーの口に押し込み、咽せ込んでいる間に、間髪を入れずハリーをベッドに押し戻した。

「さあ、大臣、お願いします。この子たちは手当てが必要です。どうか、出ていってくださいー」

再びドアが開いた。今度はダンブルドアだった。

ハリーはやっとのことで口いっぱいのチョコレートを飲み込み、また立ち上がった。

「ダンブルドア先生、シリウス・ブラックはー」

「なんてことでしょう！」マダム・ボンフリーは癇癢を起こした。

「病棟をいったいなんだと思っているんですか？校長先生、失礼ですが、どうかー」

「すまないね、ポピー。だが、わしはミスター・ポッターとミス・グレンジャーに話があるんじゃ」

ダンブルドアが穏やかに言った。

「たったいま、シリウス・ブラックと話をしてきたばかりじゃよー」

「さぞかし、ポッターに吹き込んだと同じ

“Minister, listen, please,” Hermione said; she had hurried to Harry’s side and was gazing imploringly into Fudge’s face. “I saw him too. It was Ron’s rat, he’s an Animagus, Pettigrew, I mean, and —”

“You see, Minister?” said Snape. “Confunded, both of them. ... Black’s done a very good job on them. ...”

“WE’RE NOT CONFUNDED!” Harry roared.

“Minister! Professor!” said Madam Pomfrey angrily. “I must insist that you leave. Potter is my patient, and he should not be distressed!”

“I’m not distressed, I’m trying to tell them what happened!” Harry said furiously. “If they’d just listen —”

But Madam Pomfrey suddenly stuffed a large chunk of chocolate into Harry’s mouth; he choked, and she seized the opportunity to force him back onto the bed.

“Now, *please*, Minister, these children need care. Please leave —”

The door opened again. It was Dumbledore. Harry swallowed his mouthful of chocolate with great difficulty and got up again.

“Professor Dumbledore, Sirius Black —”

“For heaven’s sake!” said Madam Pomfrey hysterically. “Is this a hospital wing or not? Headmaster, I must insist —”

“My apologies, Poppy, but I need a word with Mr. Potter and Miss Granger,” said Dumbledore

お伽噺をお聞かせしたことでしょうな？」  
スネイプが吐き棄てるように言った。

「ネズミがなんだとか、ペティグリューが  
生きているとかー」

「さよう、ブラックの話はまさにそれじ  
ゃ」

ダンブルドアは半月メガネの奥から、スネ  
イプを観察していた。

「我輩の証言はなんの重みもないというこ  
とで？」スネイプがうなった。

「ピーター・ペティグリューは『叫びの屋  
敷』にはいませんでしたぞ。校庭でも影も  
形もありませんでした」

「それは、先生がノックアウト状態だった  
からです！」ハーマイオニーが熱心に言っ  
た。

「先生はあとから来たので、お聞きになっ  
ていないー」

「ミス・グレンジャー。口出しするな！」

「まあ、まあ、スネイプ」ファッジが驚い  
てなだめた。

「このお嬢さんは、気が動転しているのだ  
から、それを考慮してあげないとー」

「わしは、ハリーとハーマイオニーと三人  
だけで話したいのじゃが」ダンブルドアが  
突然言った。

「コーネリウス、セブルス、ポピーー席  
をはずしてくれないかの」

「校長先生！」マダム・ボンフリーが慌て  
た。

「この子たちは治療が必要なんです。休息  
が必要でー」

「事は急を要する」ダンブルドアと言っ  
た。

「どうしてもじゃ」

マダム・ボンフリーは口をきつと結んで、  
病棟の端にある自分の事務所に向かって大  
股に歩き、バタンと戸を閉めて出ていっ  
た。

calmly. “I have just been talking to Sirius Black  
—”

“I suppose he’s told you the same fairy tale  
he’s planted in Potter’s mind?” spat Snape.  
“Something about a rat, and Pettigrew being  
alive —”

“That, indeed, is Black’s story,” said  
Dumbledore, surveying Snape closely through  
his half-moon spectacles.

“And does my evidence count for nothing?”  
snarled Snape. “Peter Pettigrew was not in the  
Shrieking Shack, nor did I see any sign of him  
on the grounds.”

“That was because you were knocked out,  
Professor!” said Hermione earnestly. “You  
didn’t arrive in time to hear —”

“Miss Granger, HOLD YOUR TONGUE!”

“Now, Snape,” said Fudge, startled, “the  
young lady is disturbed in her mind, we must  
make allowances —”

“I would like to speak to Harry and Hermione  
alone,” said Dumbledore abruptly. “Cornelius,  
Severus, Poppy — please leave us.”

“Headmaster!” sputtered Madam Pomfrey  
“They need treatment, they need rest —”

“This cannot wait,” said Dumbledore. “I must  
insist.”

Madam Pomfrey pursed her lips and strode  
away into her office at the end of the ward,  
slamming the door behind her. Fudge consulted  
the large gold pocket watch dangling from his

ファッジはチョッキにぶら下げていた大きな金の懐中時計を見た。

「吸魂鬼がそろそろ着いたころだ。迎えに出なければ。ダンブルドア、上の階でお目にかかろう」

ファッジは病室の外でスネイプのためにドアを開けて待っていた。

しかし、スネイプは動かなかった。

「ブラックの話など、一言も信じてはおられないでしょうな？」

スネイプはダンブルドアを見据えたまま、囁くように言った。

「わしはハリーとハーマイオニーと三人だけで話したいのじゃ」ダンブルドアがくり返した。

スネイプがダンブルドアの方に一步踏み出した。

「シリウス・ブラックは十六のときに、すでに人殺しの能力を顕した」スネイプが息をひそめた。

「お忘れになってはいますまいな、校長？ ブラックはかつて我輩を殺そうとしたことを、忘れてはいますまい？」

「セブルス、わしの記憶力は、まだ衰えてはおらんよ」ダンブルドアは静かに言った。

スネイプは踵を返し、ファッジが開けて待っていたドアから肩を怒らせて出ていった。

ドアが閉まると、ダンブルドアはハリーとハーマイオニーの方を向いた。

二人が同時に、堰を切ったように話し出した。

「先生、ブラックの言っていることはほんとうですー僕たち、ほんとうにペティグリューを見たんですー」

「ーペティグリューはルーピンが狼に変身したとき逃げたんです」

「ペティグリューはネズミですー」

「ペティグリューの前足の釣爪、じゃなか

waistcoat.

“The dementors should have arrived by now,” he said. “I’ll go and meet them. Dumbledore, I’ll see you upstairs.”

He crossed to the door and held it open for Snape, but Snape hadn’t moved.

“You surely don’t believe a word of Black’s story?” Snape whispered, his eyes fixed on Dumbledore’s face.

“I wish to speak to Harry and Hermione alone,” Dumbledore repeated.

Snape took a step toward Dumbledore.

“Sirius Black showed he was capable of murder at the age of sixteen,” he breathed. “You haven’t forgotten that, Headmaster? You haven’t forgotten that he once tried to kill *me*?”

“My memory is as good as it ever was, Severus,” said Dumbledore quietly.

Snape turned on his heel and marched through the door Fudge was still holding. It closed behind them, and Dumbledore turned to Harry and Hermione. They both burst into speech at the same time.

“Professor, Black’s telling the truth — we saw Pettigrew —”

“— he escaped when Professor Lupin turned into a werewolf —”

“— he’s a rat —”

“— Pettigrew’s front paw, I mean, finger, he cut it off —”

った、指、それ、自分で切ったんですー」

「ペティグリューがロンを襲ったんです。シリウスじゃありませんー」

しかし、ダンブルドアは手を上げて、洪水のような説明を制止した。

「今度は君たちが聞く番じゃ。頼むから、わしの言うことを途中で遮らんでくれ。なにしろ時間がないのじゃ」静かな口調だった。

「ブラックの言っていることを証明するものは何一つない。君たちの証言だけじゃー十三歳の魔法使いが二人、何を言おうと、誰も納得はせん。あの通りには、シリウスがペティグリューを殺したと証言する目撃者が、いっぱいいたのじゃ。わし自身、魔法省に、シリウスがポッター夫妻の『秘密の守人』だったと証言した」

「ルーピン先生が話してくださいますー」

どうしても我慢できず、ハリーが口を挟んだ。

「ルーピン先生はいまは森の奥深くにいて、誰にも何も話すことができません。再び人間に戻るところには、もう遅過ぎるじゃろう。シリウスは死よりも惨い状態になっておろう。さらに言うておくが、狼人間は我々の仲間うちでは信用されておらんからの。狼人間が支持したところでほとんど役には立たんじゃろーそれに、ルーピンとシリウスは旧知の仲でもあるー」

「でもー」

「よくお聞き、ハリー。もう遅過ぎる。わかるかの？ スネイプ先生の語る真相の方が、君たちの話よく説得力があるということを知らねばならん」

「スネイプはシリウスを憎んでいます」ハーマイオニーが必死で訴えた。

「シリウスが自分にバカな悪戯を仕掛けたというだけでー」

「シリウスも無実の人間らしい振る舞いを

“— Pettigrew attacked Ron, it wasn't Sirius —”

But Dumbledore held up his hand to stem the flood of explanations.

“It is your turn to listen, and I beg you will not interrupt me, because there is very little time,” he said quietly. “There is not a shred of proof to support Black's story, except your word — and the word of two thirteen-year-old wizards will not convince anybody. A street full of eyewitnesses swore they saw Sirius murder Pettigrew. I myself gave evidence to the Ministry that Sirius had been the Potters' Secret-Keeper.”

“Professor Lupin can tell you —” Harry said, unable to stop himself.

“Professor Lupin is currently deep in the forest, unable to tell anyone anything. By the time he is human again, it will be too late, Sirius will be worse than dead. I might add that werewolves are so mistrusted by most of our kind that his support will count for very little — and the fact that he and Sirius are old friends —”

“But —”

“*Listen to me, Harry.* It is too late, you understand me? You must see that Professor Snape's version of events is far more convincing than yours.”

“He hates Sirius,” Hermione said desperately. “All because of some stupid trick Sirius played on him —”

“Sirius has not acted like an innocent man. The attack on the Fat Lady — entering



しなかった。『太った婦人』を襲ったグリフィンドールにナイフを持って押し入った——生きていても、死んでいても、とにかくペティグリューがいなければ、シリウスに対する判決を覆すのは無理というものじゃ」

「でも、ダンブルドア先生は僕たちを信じてくださってます」

「その通りじゃ」ダンブルドアは落ち着いていた。

「しかし、わしは、ほかの人間に真実を悟らせる力はないし、魔法大臣の判決を覆すことも……」

ハリーはダンブルドアの深刻な顔を見上げ、足元がガラガラと急激に崩れていくような気がした。

ダンブルドアなら何でも解決できる、そういう思いに慣れきっていた。

ダンブルドアがなんにもないところから、驚くべき解決策を引き出してくれると期待していた。

それが、違う……最後の望みが消えた。

「必要なのは」ダンブルドアがゆっくりと言った。

そして、明るい青い目がハリーからハーマイオニーへと移った。

「時間じゃ」

「でも——」ハーマイオニーは何か言いかけた。

そして、ハッと目を丸くした。

「あっ！」

「さあ、よく聞くのじゃ」ダンブルドアはごく低い声で、しかも、はっきりと言った。

「シリウスは八階のフリットウィック先生の事務所に閉じ込められておる。

西塔の右から十三番目の窓じゃ。首尾よく運ばば、君たちは、今夜、一つといわずもっと、罪なきものの命を救うことができるじゃろう。ただし、二人とも、忘れるでな

Gryffindor Tower with a knife — without Pettigrew, alive or dead, we have no chance of overturning Sirius's sentence.”

“*But you believe us.*”

“Yes, I do,” said Dumbledore quietly. “But I have no power to make other men see the truth, or to overrule the Minister of Magic. ...

Harry stared up into the grave face and felt as though the ground beneath him were falling sharply away. He had grown used to the idea that Dumbledore could solve anything. He had expected Dumbledore to pull some amazing solution out of the air. But no ... their last hope was gone.

“What we need,” said Dumbledore slowly, and his light blue eyes moved from Harry to Hermione, “is more *time*.”

“But —” Hermione began. And then her eyes became very round. “OH!”

“Now, pay attention,” said Dumbledore, speaking very low, and very clearly. “Sirius is locked in Professor Flitwick's office on the seventh floor. Thirteenth window from the right of the West Tower. If all goes well, you will be able to save more than one innocent life tonight. But remember this, both of you: *you must not be seen*. Miss Granger, you know the law — you know what is at stake. ... *You — must — not — be — seen.*”

Harry didn't have a clue what was going on. Dumbledore had turned on his heel and looked back as he reached the door.

いぞ。見られてはならん。ミス・グレンジャー、規則だれは知っておろうな？ どんな危険を冒すのか、君は知っておろう……誰にも——見られては——ならんぞ」

ハリーには何がなんだかわからなかった。ダンブルドアは鐘を返し、ドアのところまで行って振り返った。

「君たちを閉じ込めておこう」ダンブルドアは腕時計を見た。

「いまは真夜中五分前じゃ。ミス・グレンジャー、三回引っくり返せばよいじゃろう。幸運を祈る」

「幸運を祈る？」

ダンブルドアがドアを閉めたあとで、ハリーはくり返した。

「三回引っくり返す？ いったい、なんのことだい？ 僕たちに、何をしろって言うんだい？」

しかし、ハーマイオニーはローブの襟のあたりをゴソゴソ探っていた。

そして中からとても長くて細い金の鎖を引っ張り出した。

「ハリー、こっちに来て」ハーマイオニーが急き込んで言った。

「早く！」ハリーはさっぱりわからないまま、ハーマイオニーのそばに行った。

ハーマイオニーは鎖を突き出していた。

ハリーはその先に、小さなキラキラした砂時計を見つけた。

「さあ——」ハーマイオニーはハリーの首にも鎖をかけた。

「いいわね？」ハーマイオニーが息を詰めて言った。

「僕たち、何してるんだい？」ハリーにはまったく見当がつかなかった。

ハリーはなんだろうと砂時計に手を伸ばした。

ペチッ

ハリーの手はハーマイオニーにたたかれ

“I am going to lock you in. It is —” he consulted his watch, “five minutes to midnight. Miss Granger, three turns should do it. Good luck.”

“Good luck?” Harry repeated as the door closed behind Dumbledore. “Three turns? What’s he talking about? What are we supposed to do?”

But Hermione was fumbling with the neck of her robes, pulling from beneath them a very long, very fine gold chain.

“Harry, come here,” she said urgently. “*Quick!*”

Harry moved toward her, completely bewildered. She was holding the chain out. He saw a tiny, sparkling hourglass hanging from it.

“Here —”

She had thrown the chain around his neck too.

“Ready?” she said breathlessly.

“What are we doing?” Harry said, completely lost.

Hermione turned the hourglass over three times.

The dark ward dissolved. Harry had the sensation that he was flying very fast, backward. A blur of colors and shapes rushed past him, his ears were pounding, he tried to yell but couldn’t hear his own voice —

And then he felt solid ground beneath his feet, and everything came into focus again —

た。

ハーマイオニーは砂時計を三回引っくり返した。

暗い病室が溶けるようになってしまった。ハリーはなんだか、とても速く、後ろ向きに飛んでいるような気がした。ぼやけた色や形が、どんどん二人を追い越していく。耳がガンガン鳴った。叫ぼうとしても、自分の声が聞こえなかった――。

やがて固い地面に足が着くのを感じた。するとまた周りの物がはっきり見え出した。

誰もいない玄関ホールに、ハリーはハーマイオニーと並んで立っていた。

正面玄関の扉が開いていて、金色の太陽の光が、流れるように石畳の床に射し込んでいる。

ハリーがくるとハーマイオニーを振り返ると、砂時計の鎖が首に食い込んだ。

「ハーマイオニー、これは……」

「こっちへ！」

ハーマイオニーはハリーの腕をつかみ、引っ張って、玄関ホールを急ぎ足で横切り、箒置き場の前まで連れてきた。

箒置き場の戸を開け、バケツやモップの中にハリーを押し込み、そのあとで自分も入って、ドアをボタンと閉めた。

「なにが――どうして――ハーマイオニー、いったい何が起こったんだい？」

「時間を逆戻りさせたの」真っ暗な中で、鎖をハリーの首からはずしながら、ハーマイオニーが囁いた。

「三時間前まで……」

ハリーは暗い中で自分の脚の見当をつけて、いやというほどつねった。

相当痛かった。ということは、奇々怪々な夢を見ているというわけではない。

「でも――」

「しっ！ 開いて！ 誰か来るわ！ たぶん――たぶん私たちよ！」ハーマイオニーは箒置

He was standing next to Hermione in the deserted entrance hall and a stream of golden sunlight was falling across the paved floor from the open front doors. He looked wildly around at Hermione, the chain of the hourglass cutting into his neck.

“Hermione, what — ?”

“In here!” Hermione seized Harry’s arm and dragged him across the hall to the door of a broom closet; she opened it, pushed him inside among the buckets and mops, then slammed the door behind them.

“What — how — Hermione, what happened?”

“We’ve gone back in time,” Hermione whispered, lifting the chain off Harry’s neck in the darkness. “Three hours back …”

Harry found his own leg and gave it a very hard pinch. It hurt a lot, which seemed to rule out the possibility that he was having a very bizarre dream.

“But —”

“Shh! Listen! Someone’s coming! I think — I think it might be us!”

Hermione had her ear pressed against the cupboard door.

“Footsteps across the hall ... yes, I think it’s us going down to Hagrid’s!”

“Are you telling me,” Harry whispered, “that we’re here in this cupboard and we’re out there too?”

き場の戸に耳を押しつけていた。

「玄関ホールを横切る足音だわ……そう、たぶん、私たちがハグリッドの小屋に行くところよ！」

「つまり」ハリーが囁いた。

「僕たちがこの中にいて、しかも外にも僕たちがいるってこと？」

「そうよ」ハーマイオニーの耳はまだ戸に取りついている。

「絶対私たちだわ……あの足音は多くても三人だもの……それに、私たち『透明マント』をかぶってるから、ゆっくり歩いているし——」

ハーマイオニーは言葉を切って、じっと耳を澄ました。

「私たち、正面の石段を下りたわ……」

ハーマイオニーは逆さにしたバケツに腰かけ、ピリピリ緊張していた。

ハリーはいくつか答えがほしかった。

「その砂時計みたいなもの、どこで手に入れたの？」

「これ、『逆転時計』っていうの」ハーマイオニーが小声で言った。

「これ、今学期、学校に戻ってきた日に、マクゴナガル先生にいただいたの。授業を全部受けるのに、今学期、ずっとこれを使っていたわ。誰にも言わないって、マクゴナガル先生と固く約束したの。先生は魔法省にありとあらゆる手紙を書いて、私に一個入手してくださったの。私が模範生だから、勉強以外には絶対これを使いませんって、先生は魔法省に、そう言わなければならなかったわ……。私、これを逆転させて、時間を戻していたのよ。だから、同時にいくつもの授業を受けられたの。わかった？ でも……」

「ハリー、ダンプルドアが私たちに何をさせたいのか、私、わからないわ。どうして三時間戻せておっしゃったのかしら？それがどうしてシリウスを救うことになるのかしら？」

“Yes,” said Hermione, her ear still glued to the cupboard door. “I’m sure it’s us. It doesn’t sound like more than three people ... and we’re walking slowly because we’re under the Invisibility Cloak —”

She broke off, still listening intently.

“We’ve gone down the front steps. ...”

Hermione sat down on an upturned bucket, looking desperately anxious, but Harry wanted a few questions answered.

“Where did you *get* that hourglass thing?”

“It’s called a Time-Turner,” Hermione whispered, “and I got it from Professor McGonagall on our first day back. I’ve been using it all year to get to all my lessons. Professor McGonagall made me swear I wouldn’t tell anyone. She had to write all sorts of letters to the Ministry of Magic so I could have one. She had to tell them that I was a model student, and that I’d never, ever use it for anything except my studies. ... I’ve been turning it back so I could do hours over again, that’s how I’ve been doing several lessons at once, see? But ...

“Harry, *I don’t understand what Dumbledore wants us to do*. Why did he tell us to go back three hours? How’s that going to help Sirius?”

Harry stared at her shadowy face.

“There must be something that happened around now he wants us to change,” he said slowly. “What happened? We were walking down to Hagrid’s three hours ago. ...”

ハリーは影のようなハーマイオニーの顔を見つめた。

「ダンブルドアが変えたいと思っている何かが、この時間帯に起こったに違いない」ハリーは考えながら言った。

「何が起こったかなく僕たち三時間前に、ハグリッドのところへ向かっていた……」

「いまが、その三時間前よ。私たち、たしかに、ハグリッドのところに向かっているわ。たったいま、私たちがここを出ていく音を聞いた……」

ハリーは顔をしかめた。精神を集中させ、脳みそを全部絞りきっているような感じがした。

「ダンブルドアが言った——僕たち、一つといわずもっと、罪なき命を救うことができるって——」ハリーはハッと気がついた。

「ハーマイオニー、僕たち、バックピークを救うんだ！」

「でも——それがどうしてシリウスを救うことになるの？」

「ダンブルドアが——窓がどこにあるか、いま教えてくれたばかりだ——プリットウィック先生の事務所の窓だ！そこにシリウスが閉じ込められている！僕たち、バックピークに乗って、その窓まで飛んでいき、シリウスを救い出すんだよ！シリウスはバックピークに乗って逃げられるしバックピークと一緒に逃げられるんだ！」

暗くてよくは見えなかったが、ハーマイオニーの顔は、怖がっているようだった。

「そんなこと、誰にも見られずにやり遂げたら、奇跡だわ！」

「でも、やってみなきゃ。そうだろう？」ハリーは立ち上がって戸に耳を押しつけた。

「外には誰もいないみたいだ……さあ、行こう……」

ハリーは戸を押し開けた。

玄関ホールには誰もいない。できるだけ静

“This *is* three hours ago, and we *are* walking down to Hagrid’s,” said Hermione. “We just heard ourselves leaving. ...”

Harry frowned; he felt as though he were screwing up his whole brain in concentration.

“Dumbledore just said — just said we could save more than one innocent life. ...” And then it hit him. “Hermione, we’re going to save Buckbeak!”

“But — how will that help Sirius?”

“Dumbledore said — he just told us where the window is — the window of Flitwick’s office! Where they’ve got Sirius locked up! We’ve got to fly Buckbeak up to the window and rescue Sirius! Sirius can escape on Buckbeak — they can escape together!”

From what Harry could see of Hermione’s face, she looked terrified.

“If we manage that without being seen, it’ll be a miracle!”

“Well, we’ve got to try, haven’t we?” said Harry. He stood up and pressed his ear against the door.

“Doesn’t sound like anyone’s there. ... Come on, let’s go. ...”

Harry pushed open the closet door. The entrance hall was deserted. As quietly and quickly as they could, they darted out of the closet and down the stone steps. The shadows were already lengthening, the tops of the trees in the Forbidden Forest gilded once more with

かに、急いで、二人は箒置場を飛び出し、石段を下りた。

もう影が長く伸び、禁じられた森の木々の梢が、さっきと同じように金色に輝いていた。

「誰かが窓から覗いていたらー」  
ハーマイオニーが背後の城の窓を見上げて上ずった声を出した。

「全速力で走ろう」ハリーは決然と言った。

「まっすぐ森に入るんだ。いいね？木の陰かなんかに隠れて、様子を窺うんだー」

「いいわ。でも温室を回り込んで行きましょう！」ハーマイオニーが息を弾ませながら言った。

「ハグリッドの小屋の戸口から見えないようにしなきゃ。じゃないと、私たち、自分たちに見られてしまう！ハグリッドの小屋に私たちがもう着くころだわ！」

ハーマイオニーの言ったことがよく読み込めないまま、ハリーは全力で走り出した。

ハーマイオニーがあとに続いた。野菜畑を突っ切り、温室に辿り着き、その陰で一呼吸入れてから、二人はまた走った。

全速力で、「暴れ柳」を避けながら、隠れ場所となる森まで駆け抜けた。

木々の陰に入って安全になってから、ハリーは振り返った。

数秒後、ハーマイオニーも息を切らしてハリーのそばに辿り着いた。

「これでいいわ」ハーマイオニーが一息入れた。

「ハグリッドのところまで忍んでいかなきゃ。見つからないようにね、ハリー...」二人は森の端を縫うように、こっそりと木々の間を進んだ。やがて、ハグリッドの小屋の戸口が垣間見え、戸を叩く音が聞こえた。

二人は急いで太い樫の木の下に隠れ、幹の両脇から覗いた。

gold.

“If anyone’s looking out of the window —”  
Hermione squeaked, looking up at the castle behind them.

“We’ll run for it,” said Harry determinedly. “Straight into the forest, all right? We’ll have to hide behind a tree or something and keep a lookout —”

“Okay, but we’ll go around by the greenhouses!” said Hermione breathlessly. “We need to keep out of sight of Hagrid’s front door, or we’ll see us! We must be nearly at Hagrid’s by now!”

Still working out what she meant, Harry set off at a sprint, Hermione behind him. They tore across the vegetable gardens to the greenhouses, paused for a moment behind them, then set off again, fast as they could, skirting around the Whomping Willow, tearing toward the shelter of the forest. ...

Safe in the shadows of the trees, Harry turned around; seconds later, Hermione arrived beside him, panting.

“Right,” she gasped. “We need to sneak over to Hagrid’s. ... Keep out of sight, Harry. ...”

They made their way silently through the trees, keeping to the very edge of the forest. Then, as they glimpsed the front of Hagrid’s house, they heard a knock upon his door. They moved quickly behind a wide oak trunk and peered out from either side. Hagrid had appeared in his doorway, shaking and white, looking

ハグリッドが、青ざめた顔で震えながら、戸口に顔を出し、誰が戸を叩いたのかとそこから中を見回した。

そして、ハリーは自分自身の声を聞いた。

「僕たちだよ。『透明マント』を着てるんだ。中に入れて。そしたらマントを脱ぐから」

「来ちゃんねえだろうが！」

ハグリッドはそう囁きながらも、一步下がった。

それから急いで戸を閉めた。

「こんな変てこなこと、僕たちいままでやったことないよ！」

ハリーが夢中で言った。

「もうちょっと行きましょう」ハーマイオニーが囁いた。

「もっとバックピークに近づかないと！」二人は木々の間をこっそり進み、かぼちゃ畑の柵に繋がれて落ち着かない様子のヒップグリフが見えるところまでやってきた。

「やる？」ハリーが囁いた。

「だめ！」とハーマイオニー。

「今バックピークを連れ出したら、委員会の人たちはハグリッドが逃がしたと思うわ！外に繋がれているところを、あの人たちが見るまでは待たなくちゃ！」

「それじゃ、やる時間が六十秒くらいしかないよ」

不可能なことをやっている、とハリーは思いはじめた。

そのとき、陶器の割れる音が、ハグリッドの小屋から聞こえてきた。

「ハグリッドがミルク入れを壊したのよ」ハーマイオニーが囁いた。

「もうすぐ、私がスキャバーズを見つけるわー」

たしかに、それから数分して、二人はハーマイオニーが驚いて叫ぶ声を聞いた。

「ハーマイオニー」ハリーは突然思いつい

around to see who had knocked. And Harry heard his own voice.

“It’s us. We’re wearing the Invisibility Cloak. Let us in and we can take it off.”

“Yeh shouldn’ve come!” Hagrid whispered. He stood back, then shut the door quickly.

“This is the weirdest thing we’ve ever done,” Harry said fervently.

“Let’s move along a bit,” Hermione whispered. “We need to get nearer to Buckbeak!”

They crept through the trees until they saw the nervous hippogriff, tethered to the fence around Hagrid’s pumpkin patch.

“Now?” Harry whispered.

“No!” said Hermione. “If we steal him now, those Committee people will think Hagrid set him free! We’ve got to wait until they’ve seen he’s tied outside!”

“That’s going to give us about sixty seconds,” said Harry. This was starting to seem impossible.

At that moment, there was a crash of breaking china from inside Hagrid’s cabin.

“That’s Hagrid breaking the milk jug,” Hermione whispered. “I’m going to find Scabbers in a moment —”

Sure enough, a few minutes later, they heard Hermione’s shriek of surprise.

“Hermione,” said Harry suddenly, “what if we — we just run in there and grab Pettigrew —”

た。

「もし、僕たちがー中に飛び込んで、ペティグリューを取っ捕まえたらどうだろう？」

「だめよ！」ハーマイオニーは震え上がって囁いた。

「わからないの？ 私たち、もっとも大切な魔法界の規則を一つ破っているところなのよ！ 時間を変えるなんて、誰もやってはいけないことなの。だーれも！ ダンプルドアの言葉を聞いたわね。もし誰かに見られたらー」

「僕たち自身とハグリッドに見られるだけじゃないか！」

「ハリー、あなた、ハグリッドの小屋に自分自身が飛び込んでくるのを見たら、どうすると思う？」

「僕ーたぶん気が狂ったのかなと思う。でなければ、何か闇の魔術がかかっていると思うー」

「その通りよ！ 事情が理解できないでしょうし、自分自身を襲うこともありうるわ！ マクゴナガル先生が教えてくださったの。魔法使いが時間にちょっかいを出したとき、どんなに恐ろしいことが起こったか…。何人もの魔法使いが、ミスを犯して、過去や未来の自分自身を殺してしまったのよ！」

「わかったよ！ ちょっと思いついただけ。僕、ただ考えて」

しかし、ハーマイオニーはハリーを小突いて、城の方を指差した。

ハリーは首を少し動かして、遠くの正面玄関をよく見ようとした。

ダンプルドア、ファッジ、年老いた委員会のメンバー、それに死刑執行人のマクネアが石段を下りてくる。

「間もなく私たちが出てくるわよ！」ハーマイオニーが声をひそめた。

まさに、間もなく、ハグリッドの小屋の裏口が開き、ハリーは自分自身と、ロンとハ

“No!” said Hermione in a terrified whisper. “Don’t you understand? We’re breaking one of the most important wizarding laws! Nobody’s supposed to change time, nobody! You heard Dumbledore, if we’re seen —”

“We’d only be seen by ourselves and Hagrid!”

“Harry, what do you think you’d do if you saw yourself bursting into Hagrid’s house?” said Hermione.

“I’d — I’d think I’d gone mad,” said Harry, “or I’d think there was some Dark Magic going on —”

“*Exactly!* You wouldn’t understand, you might even attack yourself! Don’t you see? Professor McGonagall told me what awful things have happened when wizards have meddled with time. ... Loads of them ended up killing their past or future selves by mistake!”

“Okay!” said Harry. “It was just an idea, I just thought —”

But Hermione nudged him and pointed toward the castle. Harry moved his head a few inches to get a clear view of the distant front doors. Dumbledore, Fudge, the old Committee member, and Macnair the executioner were coming down the steps.

“We’re about to come out!” Hermione breathed.

And sure enough, moments later, Hagrid’s back door opened, and Harry saw himself, Ron, and Hermione walking out of it with Hagrid. It



ーマイオニーがハグリッドと一緒に出てくるのを見た。木の陰に立って、かぼちゃ畑の自分自身の姿を見るのは、いままで感じたこともない、まったく奇妙な感覚だった。

「大丈夫だ、ピーキー。大丈夫だぞ……」ハグリッドがバックピークに話しかけている。

それからハリー、ロン、ハーマイオニーに向かって「行け。もう行け」と言った。

「ハグリッド、そんなことできないよー」

「僕たち、ほんとうは何があったのか、あの連中に話すよー」

「バックピークを殺すなんて、ダメよー」

「行け！ おまえさんたちが面倒なことになったら、ますます困る！」

ハリーが見ていると、かぼちゃ畑のハーマイオニーが「透明マント」をハリーとロンにかぶせた。

「急ぐんだ。聞くんじゃねえぞ……」

ハグリッドの小屋の戸口を叩く音がした。死刑執行人の一行の到着だ。ハグリッドは振り返り、裏戸を半開きにして小屋の中に入ってしまった。

ハリーには、小屋の周りの草むらがところどころ踏みつけられるのが見えたし、三組の足音が遠のいていくのが聞こえた。

自分と、ロンと、ハーマイオニーが行ってしまった……しかし、木々の陰に隠れている方のハリーとハーマイオニーは小屋の中で起こっていることを、半開きの裏戸を通して聞くことができた。

「獣はどこだ？」マクネアの冷たい声がする。

「外——外にいる」ハグリッドのかすれ声だ。

マクネアの顔がハグリッドの小屋の窓から覗き、バックピークをじっと見たので、ハ

was, without a doubt, the strangest sensation of his life, standing behind the tree, and watching himself in the pumpkin patch.

“It’s okay, Beaky, it’s okay ... ,” Hagrid said to Buckbeak. Then he turned to Harry, Ron, and Hermione. “Go on. Get goin’.”

“Hagrid, we can’t —”

“We’ll tell them what really happened —”

“They can’t kill him —”

“Go! It’s bad enough without you lot in trouble an’ all!”

Harry watched the Hermione in the pumpkin patch throw the Invisibility Cloak over him and Ron.

“Go quick. Don’ listen. ...”

There was a knock on Hagrid’s front door. The execution party had arrived. Hagrid turned around and headed back into his cabin, leaving the back door ajar. Harry watched the grass flatten in patches all around the cabin and heard three pairs of feet retreating. He, Ron, and Hermione had gone ... but the Harry and Hermione hidden in the trees could now hear what was happening inside the cabin through the back door.

“Where is the beast?” came the cold voice of Macnair.

“Out — outside,” Hagrid croaked.

Harry pulled his head out of sight as Macnair’s face appeared at Hagrid’s window,

リーは見えないように頭を引っ込めた。

それからファッジの声が聞こえた。

「ハグリッド、我々は——その——死刑執行の正式な通知を読み上げねばならん。短くすまずつもりだ。それから君が書類にサインする。マクネア、君も聞くことになっている。それが手続きだ——」マクネアの顔が窓から消えた。

いまだ。

いましかない。

「ここで待ってて」ハリーがハーマイオニーに囁いた。

「僕がやる」

再びファッジの声が聞こえてきたとき、ハリーは木陰から飛び出し、かぼちゃ畑の柵を飛び越え、バックピークに近づいた。

「『危険生物処理委員会』は、ヒッポダリフのバックピーク、以後被告と呼ぶ、が、六月六日の日没時に処刑さるべしと決定した——」

瞬きをしないよう注意しながら、ハリーは以前に一度やったように、バックピークの荒々しいオレンジ色の目を見つめ、お辞儀した。

バックピークはうろこで覆われた膝を曲げていったん身を低くし、また立ち上がった。

ハリーはバックピークを柵に縛りつけている綱を解こうとした。

「……死刑は斬首とし、委員会の任命する執行人、ワルデン・マクネアによって執行され……」

「バックピーク、来るんだ」ハリーが呟くように話しかけた。

「おいで、助けてあげるよ。そーっと……そーっと……」

「以下を証人とす。ハグリッド、ここに署名を……」

ハリーは全体量をかけて綱を引っ張ったが、バックピークは前足で踏ん張った。

staring out at Buckbeak. Then they heard Fudge.

“We — er — have to read you the official notice of execution, Hagrid. I’ll make it quick. And then you and Macnair need to sign it. Macnair, you’re supposed to listen too, that’s procedure —”

Macnair’s face vanished from the window. It was now or never.

“Wait here,” Harry whispered to Hermione. “I’ll do it.”

As Fudge’s voice started again, Harry darted out from behind his tree, vaulted the fence into the pumpkin patch, and approached Buckbeak.

*“It is the decision of the Committee for the Disposal of Dangerous Creatures that the hippogriff Buckbeak, hereafter called the condemned, shall be executed on the sixth of June at sundown —”*

Careful not to blink, Harry stared up into Buckbeak’s fierce orange eyes once more and bowed. Buckbeak sank to his scaly knees and then stood up again. Harry began to fumble with the knot of rope tying Buckbeak to the fence.

*“... sentenced to execution by beheading, to be carried out by the Committee’s appointed executioner, Walden Macnair ...”*

“Come on, Buckbeak,” Harry murmured, “come on, we’re going to help you. Quietly ... quietly ...”

*“... as witnessed below. Hagrid, you sign here. ...”*

「さあ、さっさと片付けましょうぞ」  
ハグリッドの小屋から委員会のメンバーの  
ひょろひょろした声が聞こえた。  
「ハグリッド、君は中にいた方がよくはな  
いかのー」  
「いんや、俺はー俺はあいつと一緒にい  
たい……あいつを独りぼっちにはしたりね  
えー」  
小屋の中から足音が響いてきた。  
「バックピーク、動いてくれ！」ハリーが  
声を殺して促した。  
ハリーはバックピークの首にかかった綱を  
グイッと引いた。  
ヒッポダリフは、イライラと翼を擦り合わ  
せながら歩きはじめた。  
森までまだ三メートルはある。  
ハグリッドの裏戸から丸見えだ。  
「マクネア、ちょっと待ちなさい」ダンプ  
ルドアの声がした。  
「君も署名せねば」  
小屋の足音が止まった。  
ハリーが綱を手繰り込むと、バックピーク  
は嘴をカチカチ言わせながら、足を速め  
た。  
かげつハーマイオニーの青い顔が木の陰か  
ら突き出していた。  
「ハリー、早く！」ハーマイオニーの口の  
形がそう言っていた。  
ハリーにはダンプルドアが小屋の中でまだ  
話している声が聞こえていた。  
もう一度綱をグイッと引いた。バックピー  
クは諦めたように早足になった。やっと木  
立のところに着いた。  
「早く！早く！」ハーマイオニーが木の陰  
から飛び出して、うめくように言いなが  
ら、自分も手綱を取り、全体重をかけてバ  
ックピークを急かした。  
ハリーが肩越しに振り返ると、もう視界が  
遮られるところまで来ていた。

Harry threw all his weight onto the rope, but  
Buckbeak had dug in his front feet.

“Well, let’s get this over with,” said the reedy  
voice of the Committee member from inside  
Hagrid’s cabin. “Hagrid, perhaps it will be better  
if you stay inside —”

“No, I — I wan’ ter be with him. ... I don’  
wan’ him ter be alone —”

Footsteps echoed from within the cabin.

“*Buckbeak, move!*” Harry hissed.

Harry tugged harder on the rope around  
Buckbeak’s neck. The hippogriff began to walk,  
rustling its wings irritably. They were still ten  
feet away from the forest, in plain view of  
Hagrid’s back door.

“One moment, please, Macnair,” came  
Dumbledore’s voice. “You need to sign too.”  
The footsteps stopped. Harry heaved on the rope.  
Buckbeak snapped his beak and walked a little  
faster.

Hermione’s white face was sticking out from  
behind a tree.

“Harry, hurry!” she mouthed.

Harry could still hear Dumbledore’s voice  
talking from within the cabin. He gave the rope  
another wrench. Buckbeak broke into a grudging  
trot. They had reached the trees. ...

“Quick! Quick!” Hermione moaned, darting  
out from behind her tree, seizing the rope too and  
adding her weight to make Buckbeak move  
faster. Harry looked over his shoulder; they were

ハグリッドの裏庭はもう見えなくなっていた。

「止まって！」ハリーがハーマイオニーに囁いた。

「みんなが音を聞きつけるかも——」

ハグリッドの裏戸がバタンと開いた。

ハリー、ハーマイオニー、バックピークはじっと音を立てずに佇んだ。

ヒッポグリフまで耳をそばだてているようだった。

静寂……そして——。

「どこじゃ？」委員会のメンバーのひょろひょろした声がした。

「ここに繋がれていたんだ！俺は見ただ！ここだった！」死刑執行人がカンカンに怒った。

「これは異なこと」ダンブルドアが言った。

どこかおもしろがっているような声だった。

「ピーキー！」ハグリッドが声をつまらせた。

シュッという音に続いて、ドサッと斧を撮り下ろす音がした。

死刑執行人が痼癢を起こして斧を柵に振り下ろしたらしい。

それから吼えるような声がした。そして、前のときには聞こえなかったハグリッドの言葉が、すすり泣きに混じって聞こえてきた。

「いない！いない！よかった。かわいい嘴のピーキー、いなくなっちゃった！きっと自分で自由になったんだ！ピーキー、賢いピーキー！」

バックピークは、ハグリッドのところに行こうとして綱を引っ張りはじめた。

ハリーとハーマイオニーは綱を握り直し、鐘が森の土にめり込むほど足を踏ん張ってバックピークを押さえた。

「誰かが綱を解いて逃がした！」死刑執行

now blocked from sight; they couldn't see Hagrid's garden at all.

“Stop!” he whispered to Hermione. “They might hear us —”

Hagrid's back door had opened with a bang. Harry, Hermione, and Buckbeak stood quite still; even the hippogriff seemed to be listening intently.

Silence ... then —

“Where is it?” said the reedy voice of the Committee member. “Where is the beast?”

“It was tied here!” said the executioner furiously. “I saw it! Just here!”

“How extraordinary,” said Dumbledore. There was a note of amusement in his voice.

“Beaky!” said Hagrid huskily.

There was a swishing noise, and the thud of an axe. The executioner seemed to have swung it into the fence in anger. And then came the howling, and this time they could hear Hagrid's words through his sobs.

“Gone! Gone! Bless his little beak, he's gone! Musta pulled himself free! Beaky, yeh clever boy!”

Buckbeak started to strain against the rope, trying to get back to Hagrid. Harry and Hermione tightened their grip and dug their heels into the forest floor to stop him.

“Someone untied him!” the executioner was snarling. “We should search the grounds, the

人が歯噛みした。

「探さなければ。校庭や森やー」

「マクネア、バックピークが盗まれたのなら、盗人はバックピークを歩かせて連れていくと思うかね？」ダンプルドアはまだおもしろがっているような声だった。

「どうせなら、空を探すがい……ハグリッド、お茶を一杯いただこうかの。ブランドイをたっぷりでもよいの」

「はーはい、先生さま」ハグリッドはうれしくて力が抜けたようだった。

「お入りくださいませ、さあー」

ハリーとハーマイオニーはじっと耳をそばだてた。

足音が聞こえ、死刑執行人がプツプツ悪態をつくのが聞こえ、戸がバタンと閉まり、それから再び静寂が訪れた。

「さあ、どうする？」ハリーが周りを見回しながら囁いた。

「ここに隠れていなきゃ」ハーマイオニーは張りつめているようだった。

「みんなが城に戻るまで待たないといけないわ。それから、バックピークに乗ってシリウスのいる部屋の窓まで飛んでいっても安全だ、というまで待つ。シリウスはあと二時間ぐらいしないとそこにはいないのよ……ああ、とても難しいことだわ……」

ハーマイオニーは振り返って、恐々森の奥を見た。

太陽がまさに沈もうとしていた。

「移動しなくちゃ」ハリーはよく考えて言った。

「『暴れ柳』が見えるところにいないといけないよ。じゃないと、何が起きているのかわからなくなるし」

「オッケー」ハーマイオニーがバックピークの手綱をしっかり握りながら言った。

「でも、ハリー、忘れないで……私たち、誰にも見られないようにしないといけないのよ」

forest —”

“Macnair, if Buckbeak has indeed been stolen, do you really think the thief will have led him away on foot?” said Dumbledore, still sounding amused. “Search the skies, if you will. ... Hagrid, I could do with a cup of tea. Or a large brandy.”

“O’ — o’ course, Professor,” said Hagrid, who sounded weak with happiness. “Come in, come in. ...”

Harry and Hermione listened closely. They heard footsteps, the soft cursing of the executioner, the snap of the door, and then silence once more.

“Now what?” whispered Harry, looking around.

“We’ll have to hide in here,” said Hermione, who looked very shaken. “We need to wait until they’ve gone back to the castle. Then we wait until it’s safe to fly Buckbeak up to Sirius’s window. He won’t be there for another couple of hours. ... Oh, this is going to be difficult. ...”

She looked nervously over her shoulder into the depths of the forest. The sun was setting now.

“We’re going to have to move,” said Harry, thinking hard. “We’ve got to be able to see the Whomping Willow, or we won’t know what’s going on.”

“Okay,” said Hermione, getting a firmer grip on Buckbeak’s rope. “But we’ve got to keep out of sight, Harry, remember. ...”

暗闇がだんだん色濃く二人を包み、二人でこういう事があったと話しながら、二人は森のすそに沿って進み、「柳」が垣間見える木立の陰に隠れた。

「ロンが来た！」突然ハリーが声をあげた。

黒い影が、芝生を横切って駆けてくる。

その声が静かな夜の空気を震わせた。

「スカバーズから離れろー離れるんだースカバーズこっちへおいでー」

それから、どこからともなく、もう二人の姿が現われるのが見えた。

ハリー自身とハーマイオニーがロンを追ってくる。

そしてロンがスライディングするのを見た。

「捕まえた！ とっとと消えろ、いやな猫めー」

「今度はシリウスだ！」ハリーが言った。

「柳」の根元から、大きな犬の姿が躍り出た。

犬がハリーを転がし、ロンをくわえるのを二人は見た……。

「ここから見てると、よけいひどく見えるよねー」

ハリーは犬がロンを木の根元に引きずり込むのを眺めながら言った。

「アイタターー見てよ、僕、いま、木に殴られたー君も殴られたよー変てこな気分だー」

「暴れ柳」はギシギシと軋み、低い方の枝を鞭のように動かしていた。

二人は自分たち自身が木の幹に辿り着こうとあちこち走り回るのを見ていた。

そして、木が動かなくなった。

「クルックシャンクスがあそこで木のコブを押したんだわ」ハーマイオニーが言った。

They moved around the edge of the forest, darkness falling thickly around them, until they were hidden behind a clump of trees through which they could make out the Willow.

“There’s Ron!” said Harry suddenly.

A dark figure was sprinting across the lawn and its shout echoed through the still night air.

“Get away from him — get away — Scabbers, come *here* —”

And then they saw two more figures materialize out of nowhere. Harry watched himself and Hermione chasing after Ron. Then he saw Ron dive.

“*Gotcha!* Get off, you stinking cat —”

“There’s Sirius!” said Harry. The great shape of the dog had bounded out from the roots of the Willow. They saw him bowl Harry over, then seize Ron. ...

“Looks even worse from here, doesn’t it?” said Harry, watching the dog pulling Ron into the roots. “Ouch — look, I just got walloped by the tree — and so did you — this is *weird* —”

The Whomping Willow was creaking and lashing out with its lower branches; they could see themselves darting here and there, trying to reach the trunk. And then the tree froze.

“That was Crookshanks pressing the knot,” said Hermione.

“And there we go ... ,” Harry muttered. “We’re in.”

The moment they disappeared, the tree began

「僕たちが入っていくよ……」ハリーが呟いた。

「僕たち、入ったよ」

みんなの姿が消えた瞬間、「柳」はまた動き出した。

その数秒後、二人はすぐ近くで足音を聞いた。

ダンブルドア、マクネア、ファッジ、それに年老いた委員会のメンバーが城へ戻るところだった。

「私たちが地下通路に降りたすぐあとだわ！あのときダンブルドアと一緒に来てくれてさえいたら——…」ハーマイオニーが言った。

「そしたら、マクネアもファッジも一緒についてきてたよ」ハリーが苦々しげに言った。

「賭けてもいいけど、ファッジは、シリウスをその場で殺せて、マクネアに指示したと思うよ」

四人が城の階段を上って見えなくなるまで、二人は見つめていた。

しばらくの間、あたりには誰もいなかった。

そして——。

「ルーピンが来た！」ハリーが言った。

もう一人誰かの姿が石段を下り、「柳」に向かって走ってくる。

ハリーは空を見上げた。

雲が完全に月を覆っている。

ルーピンが折れた枝を拾って、木の幹のコブを突つのが見えた。

木は暴れるのをやめ、ルーピンもまた木の根元の穴へと消えた。

「ルーピンが『マント』を拾ってくれてたらなあ。そこに置きっぱなしになってるのに……」ハリーはそう言うと、ハーマイオニーの方に向き直った。

「もし、いま僕が急いで走って行ってマントを取ってくれば、スネイプはマントを手

to move again. Seconds later, they heard footsteps quite close by. Dumbledore, Macnair, Fudge, and the old Committee member were making their way up to the castle.

“Right after we’d gone down into the passage!” said Hermione. “If *only* Dumbledore had come with us …”

“Macnair and Fudge would’ve come too,” said Harry bitterly. “I bet you anything Fudge would’ve told Macnair to murder Sirius on the spot. …”

They watched the four men climb the castle steps and disappear from view. For a few minutes the scene was deserted. Then —

“Here comes Lupin!” said Harry as they saw another figure sprinting down the stone steps and haring toward the Willow. Harry looked up at the sky. Clouds were obscuring the moon completely.

They watched Lupin seize a broken branch from the ground and prod the knot on the trunk. The tree stopped fighting, and Lupin, too, disappeared into the gap in its roots.

“If he’d only grabbed the cloak,” said Harry. “It’s just lying there. …”

He turned to Hermione.

“If I just dashed out now and grabbed it, Snape’d never be able to get it and —”

“Harry, *we mustn’t be seen!*”

“How can you stand this?” he asked Hermione fiercely. “Just standing here and

に入れることができなくなるし、そうすれば――」

「ハリー、私たち婆を見られてはいけないのよ！」

「君、どうして我慢できるんだい？」ハリーは激しい口調でハーマイオニーに言った。

「ここに立って、なるがままに任せて、なんもしないで見てるだけなのかい？」

ハリーはちょっと戸惑いながら言葉を続けた。

「像、『マント』を取ってくる！」

「ハリー、だめ！」

ハーマイオニーがハリーのローブをつかんで引き戻した。

間一髪。ちょうどそのとき大きな歌声が聞こえた。ハグリッドだ。

城に向かう道すがら、足もとをふらつかせ、声を張りあげて歌っている。

手には大きな瓶をブラブラさせていた。

「でしょ？」ハーマイオニーが囁いた。

「どうなってたか、わかるでしょ？ 私たち、人に見られてはいけないのよ！ ダメよ、バックピーク！」

ヒッポグリフはハグリッドのそばに行きたくて、必死になっていた。

ハリーも手綱をつかみ、バックピークを引き戻そうと引っ張った。二人はハグリッドがほろ酔いの千鳥足で城の方に行くのを見ていた。ハグリッドの姿が見えなくなった。バックピークは逃げようと暴れるのをやめ、悲しそうに首うなだれた。

それからほんの二分もたたないうちに、城の扉が再び開き、スネイプが突然姿を現わし、「柳」に向かって走り出した。

スネイプが木のそばで急に立ち止まり、周りを見回すのを、二人で見つめながら、ハリーは拳を握り締めた。スネイプが「マント」をつかみ、持ち上げて見ている。

「汚らしい手でさわるな」ハリーは息を

watching it happen?” He hesitated. “I’m going to grab the cloak!”

“Harry, *no!*”

Hermione seized the back of Harry’s robes not a moment too soon. Just then, they heard a burst of song. It was Hagrid, making his way up to the castle, singing at the top of his voice, and weaving slightly as he walked. A large bottle was swinging from his hands.

“*See?*” Hermione whispered. “*See what would have happened?* We’ve got to keep out of sight! *No, Buckbeak!*”

The hippogriff was making frantic attempts to get to Hagrid again; Harry seized his rope too, straining to hold Buckbeak back. They watched Hagrid meander tipsily up to the castle. He was gone. Buckbeak stopped fighting to get away. His head drooped sadly.

Barely two minutes later, the castle doors flew open yet again, and Snape came charging out of them, running toward the Willow.

Harry’s fists clenched as they watched Snape skid to a halt next to the tree, looking around. He grabbed the cloak and held it up.

“Get your filthy hands off it,” Harry snarled under his breath.

“Shh!”

Snape seized the branch Lupin had used to freeze the tree, prodded the knot, and vanished from view as he put on the cloak.

“So that’s it,” said Hermione quietly. “We’re



ひそめ、歯噛みした。

「しっ！」

スネイプはルーピンが柳を固定するのに使った枝を拾い、それで木のコブを突き、「マント」をかぶって姿を消した。

「これで全部ね」ハーマイオニーが静かに言った。

「私たち全員、あそこにいるんだわ……さあ、あとは私たちがまた出てくるまで待つだけ……」

ハーマイオニーはバックピークの手綱の端を一番手近の木にしっかり結びつけ、乾いた土の上に腰を下ろし、膝を抱きかかえた。

「ハリー、私、わからないことがあるの… …どうして、吸魂鬼はシリウスを捕まえられなかったのかしら——私、吸魂鬼がやってくるころまでは覚えてるんだけどーそれから気を失ったと思う……ほんとに大勢いたわ……」

ハリーも腰を下ろした。

そして自分が見たことを話した。一番近くにいた吸魂鬼がハリーの口元に口を近づけたこと、そのとき大きな銀色の何かが、湖のむこうから疾走してきて、吸魂鬼を退却させたこと。説明し終わったとき、ハーマイオニーの口元がかすかに開いていた。

「でも、それ、なんだったの？」

「吸魂鬼を追い払うものは、たった一つしかありえない」ハリーが言った。

「本物の守護霊だ。強力な」

「でも、いったい誰が？」ハリーは無言だった。

湖の向こう岸に見えた人影を、ハリーは思い返していた。

あれが誰だと思ったか、ハリーは自分ではわかっていた……でも、そんなことがありうるだろうか？

「どんな人だったか見たの？」ハーマイオニーは興味津々で聞いた。

all down there ... and now we've just got to wait until we come back up again. ...”

She took the end of Buckbeak's rope and tied it securely around the nearest tree, then sat down on the dry ground, arms around her knees.

“Harry, there's something I don't understand. ... Why didn't the dementors get Sirius? I remember them coming, and then I think I passed out ... there were so many of them. ...”

Harry sat down too. He explained what he'd seen; how, as the nearest dementor had lowered its mouth to Harry's, a large silver something had come galloping across the lake and forced the dementors to retreat.

Hermione's mouth was slightly open by the time Harry had finished.

“But what was it?”

“There's only one thing it could have been, to make the dementors go,” said Harry. “A real Patronus. A powerful one.”

“But who conjured it?”

Harry didn't say anything. He was thinking back to the person he'd seen on the other bank of the lake. He knew who he thought it had been ... but how *could* it have been?

“Didn't you see what they looked like?” said Hermione eagerly. “Was it one of the teachers?”

“No,” said Harry. “He wasn't a teacher.”

“But it must have been a really powerful wizard, to drive all those dementors away. ... If

「先生の一人みたいだった？」

「ううん。先生じゃなかった」

「でも、ほんとうに力のある魔法使いに違いないわ。あんなに大勢の吸魂鬼を追い払うんですもの……守護霊がそんなに眩く輝いていたのだったら、その人を照らしたんじゃないの？ 見えなかったのー？」

「ううん、僕、見たよ」ハリーがゆっくりと答えた。

「でも……僕、きつと、思い込んだだけなんだ……混乱してたんだ……そのすぐあとで気を失ってしまったし……」

「誰だと思ったの？」

「僕——」

ハリーは言葉を呑み込んだ。言おうとしていることが、どんなに奇妙に聞こえるか、わかっていた。

「僕、父さんだと思った」

ハリーはハーマイオニーをチラリと見た。今度はその口が完全にあんぐり開いていた。ハーマイオニーはハリーを、驚きとも哀れみともつかない目で見つめていた。

「ハリー、あなたのお父さま——あの——お亡くなりになったのよ」

ハーマイオニーが静かに言った。

「わかってるよ」ハリーが急いで言った。

「お父さまの幽霊を見たってわけ？」

「わからない……ううん……実物があるみたいだった……」

「だったら——」

「たぶん、気のせいだ。だけど……僕の見たかぎりでは……父さんみたいだった……僕、写真を持ってるんだ……」

ハーマイオニーは、ハリーが正気を失ったのではないかと心配そうに、見つめ続けた。

「バカげてるって、わかってるよ」ハリーはきっぱりと言った。

そしてバックピークの方を見た。

the Patronus was shining so brightly, didn't it light him up? Couldn't you see — ?”

“Yeah, I saw him,” said Harry slowly. “But ... maybe I imagined it. ... I wasn't thinking straight. ... I passed out right afterward. ...”

“Who did you think it was?”

“I think —” Harry swallowed, knowing how strange this was going to sound. “I think it was my dad.”

Harry glanced up at Hermione and saw that her mouth was fully open now. She was gazing at him with a mixture of alarm and pity.

“Harry, your dad's — well — *dead*,” she said quietly.

“I know that,” said Harry quickly.

“You think you saw his ghost?”

“I don't know ... no ... he looked solid. ...”

“But then —”

“Maybe I was seeing things,” said Harry. “But ... from what I could see ... it looked like him. ... I've got photos of him. ...”

Hermione was still looking at him as though worried about his sanity.

“I know it sounds crazy,” said Harry flatly. He turned to look at Buckbeak, who was digging his beak into the ground, apparently searching for worms. But he wasn't really watching Buckbeak.

He was thinking about his father and about his

バックピークは虫でも探しているのか、土をほじくり返していた。しかし、ハリーはほんとうはバックピークを見ていたのではなかった。ハリーは父親のこと、一番古くからの三人の友人のことを考えていたのだ……ムーニー、ワームテール、パッドフット、プリングズ……今夜、四人全員が校庭にいたのだろうか？ ワームテールは死んだと、みんなが思っていたのに、今夜現われた――父さんが同じように現われるのが、そんなにありえないことだろうか？ 湖のむこうに見たものは幻だったのか？ あまりに遠くて、姿がはっきり見えなかった……でも、一瞬、意識を失う前に、ハリーは確信を持ったのだ……。

頭上の木の葉が、かすかに夜風にそよいだ。月が雲の切れ目から現われては消えた。

ハーマイオニーは座ったまま、「柳」の方を見て待ち続けた……。

そして、ついに一時間以上たってから……。

「出てきたわ！」ハーマイオニーが囁いた。

二人は立ち上がった。バックピークは首を上げた。

ルーピン、ロン、ペティグリューが根元の穴から、窮屈そうに這い登って出てきた。

つぎはハーマイオニーだった……それから、気を失ったままのスネイプが、不気味に漂いながら浮かび上がってきた。そのあとはハリーとブラックだ。全員が城に向かって歩き出した。

ハリーの鼓動が速くなった。チラリと空を見上げた。

もう間もなく雲が流れ、月を露にする……。

「ハリー」ハーマイオニーが呟くように言った。

まるでハリーの考えを見抜いたようだった。

father's three oldest friends ... Moony, Wormtail, Padfoot, and Prongs. ... Had all four of them been out on the grounds tonight? Wormtail had reappeared this evening when everyone had thought he was dead. ... Was it so impossible his father had done the same? Had he been seeing things across the lake? The figure had been too far away to see distinctly ... yet he had felt sure, for a moment, before he'd lost consciousness. ...

The leaves overhead rustled faintly in the breeze. The moon drifted in and out of sight behind the shifting clouds. Hermione sat with her face turned toward the Willow, waiting.

And then, at last, after over an hour ...

“Here we come!” Hermione whispered.

She and Harry got to their feet. Buckbeak raised his head. They saw Lupin, Pettigrew, and Ron clambering awkwardly out of the hole in the roots ... followed by the unconscious Snape, drifting weirdly upward. Next came Harry, Hermione, and Black. They all began to walk toward the castle.

Harry's heart was starting to beat very fast. He glanced up at the sky. Any moment now, that cloud was going to move aside and show the moon. ...

“Harry,” Hermione muttered as though she knew exactly what he was thinking, “we've got to stay put. We mustn't be seen. There's nothing we can do. ...”

“So we're just going to let Pettigrew escape

「じっとしていなきゃいけないのよ。誰かに見られてはいけないの。私たちにはどうにもできないことなんだから……」

「じゃ、またペティグリューを逃がしてやるだけなんだ……」ハリーは低い声で言った。

「暗闇で、どうやってネズミを探すっていうの？」ハーマイオニーがピシャリと言った。

「私たちにはどうにもできないことよ！ 私たち、シリウスを救うために時間を戻したの。ほかのことはいっさいやっちゃいけないの！」

「わかったよ！」

月が雲の陰から滑り出た。校庭のむこう側で、小さな人影が立ち止まったのが見えた。

それから、二人はその影の動きに目を止めた——。

「ルーピンがいよいよだわ」ハーマイオニーが囁いた。「変身している——」

「ハーマイオニー！」ハリーが突然呼びかけた。

「行かないと！」

「ダメよ。何度も言ってるでしょ——」

「違う。割り込むんじゃない。ルーピンがまもなく森に駆け込んでくる。僕たちのいるところに！」

ハーマイオニーが息を呑んだ。

「早く！」大急ぎでバックピークの綱を解きながら、ハーマイオニーがうめいた。

「早く！ どこへ行ったらいいの？ どこに隠れるの？ 吸魂鬼がもうすぐやってくるわ——」

「ハグリッドの小屋に戻ろう！ いまは空っぽだ——行こう！」

二人は転げるように走り、バックピークがそのあとを悠々と走った。

背後から狼人間の遠吠えが聞こえてきた……。

all over again. …” said Harry quietly.

“How do you expect to find a rat in the dark?” snapped Hermione. “There’s nothing we can do! We came back to help Sirius; we’re not supposed to be doing anything else!”

“All right!”

The moon slid out from behind its cloud. They saw the tiny figures across the grounds stop. Then they saw movement —

“There goes Lupin,” Hermione whispered. “He’s transforming —”

“Hermione!” said Harry suddenly. “We’ve got to move!”

“We mustn’t, I keep telling you —”

“Not to interfere! Lupin’s going to run into the forest, right at us!”

Hermione gasped.

“Quick!” she moaned, dashing to untie Buckbeak. “Quick! Where are we going to go? Where are we going to hide? The dementors will be coming any moment —”

“Back to Hagrid’s!” Harry said. “It’s empty now — come on!”

They ran as fast as they could, Buckbeak cantering along behind them. They could hear the werewolf howling behind them. …

The cabin was in sight; Harry skidded to the door, wrenched it open, and Hermione and Buckbeak flashed past him; Harry threw himself in after them and bolted the door. Fang the

小屋が見えた。ハリーは戸の前で急停止し、グイッと戸を開けた。電光石火、ハーマイオニーとバックピークがハリーの前を駆け抜けて入った。

ハリーがそのあとに飛び込み、戸の錠前を下ろした。

ボアハウンド犬のファングが吼えたてた。

「しーっ、ファング。私たちよ！」

ハーマイオニーが急いで近寄って耳の後ろをカリカリ撫で、静かにさせた。

「危なかったわ！」ハーマイオニーが言った。

「ああ……」ハリーは窓から外を見ていた。

ここからだ、何が起きているのか見えにくかった。

バックピークはまたハグリッドの小屋に戻れてとてもうれしそうだった。

暖炉の前に寝そべり、満足げに翼を畳み、一眠りしそうな気配だった。

「ねえ、僕、また外に出た方がいいと思うんだ」ハリーが考えながら言った。

「何が起きているのか、見えないしくいつ行動すべきなのか、これじゃわからなくない？」

ハーマイオニーが顔を上げた。疑っているような表情だ。

「僕、割り込むつもりはないよ」ハリーが急いで言った。

「でも、何が起きているか見えないと、シリウスをいつ救い出したらいいのかかわからないだろ？」

「ええ……それなら、いいわ……私、ここでバックピークと待ってる……でも、ハリー、気をつけて——狼人間がいるしく吸魂鬼も——」ハリーは再び外に出て、小屋に沿って回り込んだ。遠くでキャンキャンという鳴き声が聞こえた。吸魂鬼がシリウスに追っているということだ……自分とハーマイオニーがもうすぐシリウスのところに

boarhound barked loudly.

“Shh, Fang, it’s us!” said Hermione, hurrying over and scratching his ears to quieten him. “That was really close!” she said to Harry.

“Yeah …”

Harry was looking out of the window. It was much harder to see what was going on from here. Buckbeak seemed very happy to find himself back inside Hagrid’s house. He lay down in front of the fire, folded his wings contentedly, and seemed ready for a good nap.

“I think I’d better go outside again, you know,” said Harry slowly. “I can’t see what’s going on — we won’t know when it’s time —”

Hermione looked up. Her expression was suspicious.

“I’m not going to try and interfere,” said Harry quickly. “But if we don’t see what’s going on, how’re we going to know when it’s time to rescue Sirius?”

“Well … okay, then … I’ll wait here with Buckbeak … but Harry, be careful — there’s a werewolf out there — and the dementors —”

Harry stepped outside again and edged around the cabin. He could hear yelping in the distance. That meant the dementors were closing in on Sirius. … He and Hermione would be running to him any moment. …

Harry stared out toward the lake, his heart doing a kind of drumroll in his chest. … Whoever had sent that Patronus would be

駆けつけるはずだ――。

ハリーは湖の方をじっと見た。胸の中で、心臓がドラムの早打ちのように鳴っている。

あの守護霊を送り出した誰かが、もうすぐ現われる……。ほんの一瞬、ハリーは決心がつかず、ハグリッドの小屋の戸の前で立ち止まった。姿を見られてはならない。でも、見られたいのではない。自分が見る方に回りたいたいのだ……。どうしても知りたい……。

でも、吸魂鬼がいる。

暗闇の中から湧き出るように、吸魂鬼が四方八方から出てくる。

湖の周りを滑るように……。しかしハリーが立っているところからは遠ざかるように、湖のむこう岸へと動いている……。それならハリーは吸魂鬼に近づかなくてもすむはずだ……。ハリーは走り出した。

父親のことしか頭になかった……。もしあれが父さんだったら……。知りたい、確かめなければ……。

だんだん湖が近づいてきた。しかし、誰もいる気配がない。

むこう岸に、小さな銀色の光が見えた――自分自身が守護霊を出そうとしている――。

水際に木の茂みがあった。ハリーはその陰に飛び込み、木の葉を透かして必死に目を凝らした。

むこうでは、微かな銀色の光がふっと消えた。

恐怖と興奮がハリーの体を貫いた――いまだ――「早く」ハリーはあたりを見回しながら呟いた。

「父さん、どこなの――早く……」

しかし、誰も現われない。

ハリーは顔を上げて、むこう岸の吸魂鬼の輪を見た。

一人がフードを脱いだ。救い主が現われるならいまだ――なのに、今回は誰も来てい

appearing at any moment. ...

For a fraction of a second he stood, irresolute, in front of Hagrid's door. *You must not be seen.* But he didn't want to be seen. He wanted to do the seeing. ... He had to know. ...

And there were the dementors. They were emerging out of the darkness from every direction, gliding around the edges of the lake. ... They were moving away from where Harry stood, to the opposite bank. ... He wouldn't have to get near them. ...

Harry began to run. He had no thought in his head except his father. ... If it was him ... if it really was him ... he had to know, had to find out. ...

The lake was coming nearer and nearer, but there was no sign of anybody. On the opposite bank, he could see tiny glimmers of silver — his own attempts at a Patronus —

There was a bush at the very edge of the water. Harry threw himself behind it, peering desperately through the leaves. On the opposite bank, the glimmers of silver were suddenly extinguished. A terrified excitement shot through him — any moment now —

“Come on!” he muttered, staring about. “Where are you? Dad, come on —”

But no one came. Harry raised his head to look at the circle of dementors across the lake. One of them was lowering its hood. It was time for the rescuer to appear — but no one was coming to help this time —

ない――。

ハリーはハッとした――わかった。

父さんを見たんじゃない――自分自身を見たんだ――。

ハリーは茂みの陰から飛び出し、杖を取り出した。

「エクスペクト、パトローナム！」ハリーは叫んだ。

すると、杖の先から、ぼんやりした霞ではなく、目も眩むほどまぶしい、銀色の動物が噴き出した。

ハリーは目を細めて、なんの動物なのか見ようとした。

馬のようだ。暗い湖の面を、むこう岸へと音もなく疾走していく。

頭を下げ、群がる吸魂鬼に向かって突進していくのが見える……今度は、地上に倒れている暗い影の周りを、グルグル駆け回っている。

吸魂鬼があとずさりしていく。

散り散りになり、暗闇の中に退却して――いなくなった。

守護霊が向きを変えた。静かな水面を渡り、ハリーの方に健やかに走りながら近づいてくる。

馬ではない。一角獣でもない。牡鹿だった。空にかかる月ほどに、弦い輝きを放ち……ハリーの方に戻ってくる……

それは、岸辺で立ち止まった。大きな銀色の目でハリーをじっと見つめるその牡鹿は、柔らかな水べの土に、蹄の跡さえ残していなかった。

それはゆっくりと頭を下げた。角のある頭を。そして、ハリーは気づいた……。

「プロングズ」ハリーが呟いた。

震える指で、触れようと手を伸ばすと、それはフッと消えてしまった。

手を伸ばしたまま、ハリーはその場に佇んでいた。

すると、突然背後で蹄の音がして、ハリー

And then it hit him — he understood. He hadn't seen his father — he had seen *himself* —

Harry flung himself out from behind the bush and pulled out his wand.

“*EXPECTO PATRONUM!*” he yelled.

And out of the end of his wand burst, not a shapeless cloud of mist, but a blinding, dazzling, silver animal. He screwed up his eyes, trying to see what it was. It looked like a horse. It was galloping silently away from him, across the black surface of the lake. He saw it lower its head and charge at the swarming dementors. ... Now it was galloping around and around the black shapes on the ground, and the dementors were falling back, scattering, retreating into the darkness. ... They were gone.

The Patronus turned. It was cantering back toward Harry across the still surface of the water. It wasn't a horse. It wasn't a unicorn, either. It was a stag. It was shining brightly as the moon above ... it was coming back to him. ...

It stopped on the bank. Its hooves made no mark on the soft ground as it stared at Harry with its large, silver eyes. Slowly, it bowed its antlered head. And Harry realized ...

“*Prongs,*” he whispered.

But as his trembling fingertips stretched toward the creature, it vanished.

Harry stood there, hand still outstretched. Then, with a great leap of his heart, he heard hooves behind him — he whirled around and saw Hermione dashing toward him, dragging

は胸を躍らせた——急いで振り返ると、ハーマイオニーが、バックピークを引っ張って、猛烈な勢いでハリーの方に駆けてくる。

「何をしたの？ ハーマイオニーが激しく問い詰めた。

「何が起きているか見るだけだって、あなた、そう言ったじゃない！」

「僕たち全員の命を救っただけだ……。ここにきて——この茂みの陰に説明するから」

何が起こったのか、話を聞きながら、ハーマイオニーはまたしても口をポカンと開けていた。

「誰かに見られた？」

「ああ。話を聞いてなかったの？ 僕が僕を見たよ。でも、僕は父さんだと思ったんだ！ だから大丈夫！」

「ハリー、私、信じられない——あの吸魂鬼を全部追い払うような守護霊を、あなたが創り出したなんて！ それって、とっても、とっても高度な魔法なのよ……」

「僕、できるとわかってたんだ。だって、さっき一度出したわけだから……僕の言っていること、何か変かなあ？」

「よくわからないわ——ハリー、スネイプを見て！」

茂みの間から、二人はむこう岸をじっと見た。

スネイプが意識を取り戻した。

担架を作り、ぐったりしているハリー、ハーマイオニー、ブラックをそれぞれその上に載せた。四つ目の担架には、当然ロンが載っているはずだが、すでにスネイプのわきに浮かんでいた。

それから、スネイプは杖を前に突き出し、担架を城に向けて運びはじめた。

「さあ、そろそろ時間だわ」ハーマイオニーは時計を見ながら緊張した声を出した。

「ダンブルドアが病棟のドアに鍵をかけるまで、あと四十五分くらいあるわ。シリウ

Buckbeak behind her.

“*What did you do?*” she said fiercely. “You said you were only going to keep a lookout!”

“I just saved all our lives ... ,” said Harry. “Get behind here — behind this bush — I’ll explain.”

Hermione listened to what had just happened with her mouth open yet again.

“Did anyone see you?”

“Yes, haven’t you been listening? *I* saw me but I thought I was my dad! It’s okay!”

“Harry, I can’t believe it. ... You conjured up a Patronus that drove away all those dementors! That’s very, *very* advanced magic. ...”

“I knew I could do it this time,” said Harry, “because I’d already done it. ... Does that make sense?”

“I don’t know — Harry, look at Snape!”

Together they peered around the bush at the other bank. Snape had regained consciousness. He was conjuring stretchers and lifting the limp forms of Harry, Hermione, and Black onto them. A fourth stretcher, no doubt bearing Ron, was already floating at his side. Then, wand held out in front of him, he moved them away toward the castle.

“Right, it’s nearly time,” said Hermione tensely, looking at her watch. “We’ve got about forty-five minutes until Dumbledore locks the door to the hospital wing. We’ve got to rescue Sirius and get back into the ward before anybody



スを救い出して、それから、私たちがいないことに誰かが気づかないうちに病室に戻っていないければ……」

二人は空行く雲が湖に映るさまを見ながら、ひたすら待った。

周りの茂みが夜風にサヤサヤと囁き、バックピークは退屈して、また虫ほじりを始めた。

「シリウスはもう上に行ったと思う？」ハリーが時計を見ながら言った。

そして城を見上げ、西の塔の右からの窓の数を数えはじめた。

「見て！」ハーマイオニーが囁いた。

「あれ、誰かしら？お城から誰か出てくるわ！」

ハリーは暗闇を透かして見た。

闇の中を、男が一人、急いで校庭を横切り、どこかの門に向かっている。

ベルトのところで何かがキラッと光った。

「マクネア！死刑執行人だ！吸魂鬼を迎えにいくところだ。いまだよ、ハーマイオニー——」ハーマイオニーがバックピークの背に両手をかけ、ハリーが手を貸してハーマイオニーを押し上げた。ハリーはハーマイオニーが凄く軽い事に少し吃驚した。

それからハリーは灌木の低い枝に脚をかけ、ハーマイオニーの前に跨った。

ハリーはバックピークの綱を手練りよせ、バックピークの首の後ろに一度回してから首輪の反対側に結びつけ、手綱のようにしっらえた。

「いいかい？」ハリーが囁いた。

「僕につかまるといい——」

ハリーはバックピークの脇腹を踵で小突いた。

バックピークは闇を裂いて高々と舞い上がった。

ハリーはその脇腹を膝でしっかり挟んでいた。

巨大な翼が自分の膝下で力強く羽ばたくの

realizes we're missing. ...”

They waited, watching the moving clouds reflected in the lake, while the bush next to them whispered in the breeze. Buckbeak, bored, was ferreting for worms again.

“D’ you reckon he’s up there yet?” said Harry, checking his watch. He looked up at the castle and began counting the windows to the right of the West Tower.

“Look!” Hermione whispered. “Who’s that? Someone’s coming back out of the castle!”

Harry stared through the darkness. The man was hurrying across the grounds, toward one of the entrances. Something shiny glinted in his belt.

“Macnair!” said Harry. “The executioner! He’s gone to get the dementors! This is it, Hermione —”

Hermione put her hands on Buckbeak’s back and Harry gave her a leg up. Then he placed his foot on one of the lower branches of the bush and climbed up in front of her. He pulled Buckbeak’s rope back over his neck and tied it to the other side of his collar like reins.

“Ready?” he whispered to Hermione. “You’d better hold on to me —”

He nudged Buckbeak’s sides with his heels.

Buckbeak soared straight into the dark air. Harry gripped his flanks with his knees, feeling the great wings rising powerfully beneath them. Hermione was holding Harry very tight around the waist; he could hear her muttering, “Oh, no

を感じた。

ハーマイオニーはハリーの腰にピッタリしがみついていた。

「ああ、ダメーいやよーああ、私、ほんとに、これ、いやだわー」

ハーマイオニーがそう呟くのが聞こえた。

ハーマイオニーが可愛くて噴出しそうになったが、ハリーはバックピークを駆り立てる事に集中した。

音もなく、二人は城の上階へと近づいていた……。

手綱の左側をグイッと引くと、バックピークが向きを変えた。

ハリーはつぎつぎとそばを通り過ぎる窓を数えようとした――。

「ドゥドゥ！」ハリーは力のかぎり手綱を引き締めた。

バックピークは速度を落とし、二人は空中で停止した。

ただ、バックピークは空中に浮かんでいられるように翼を羽ばたかせ、そのたびに上に下にと、一・二メートル揺らぎはしたが。

「あそこだ！」窓に沿って上に浮き上がったときに、ハリーはシリウスを見つけた。

バックピークの翼が下がったとき、ハリーは手を伸ばし、窓ガラスを強く叩くことができた。ブラックが顔を上げた。

あっけに取られて口を開くのが見えた。

ブラックは弾けるように椅子から立ち上がり、窓際に駆けよって開けようとしたが、鍵がかかっていた。

「退がって！」ハーマイオニーが呼びかけ、杖を取り出した。

左手でしっかりとハリーのローブをつかまえたままだ。

「アロホモラ！」

窓がパッと開いた。

「どーどうやって……」ブラックはヒップグリフを見つめながら、声にならない声

— I don't like this — oh, I *really* don't like this —”

Harry urged Buckbeak forward. They were gliding quietly toward the upper floors of the castle. ... Harry pulled hard on the left-hand side of the rope, and Buckbeak turned. Harry was trying to count the windows flashing past —

“Whoa!” he said, pulling backward as hard as he could.

Buckbeak slowed down and they found themselves at a stop, unless you counted the fact that they kept rising up and down several feet as the hippogriff beat his wings to remain airborne.

“He's there!” Harry said, spotting Sirius as they rose up beside the window. He reached out, and as Buckbeak's wings fell, was able to tap sharply on the glass.

Black looked up. Harry saw his jaw drop. He leapt from his chair, hurried to the window and tried to open it, but it was locked.

“Stand back!” Hermione called to him, and she took out her wand, still gripping the back of Harry's robes with her left hand.

“*Alohomora!*”

The window sprang open.

“How — how — ?” said Black weakly, staring at the hippogriff.

“Get on — there's not much time,” said Harry, gripping Buckbeak firmly on either side of his sleek neck to hold him steady. “You've got to get out of here — the dementors are

で聞いた。

「乗ってー時間が無いんです」

ハリーはバックピークの滑らかな首の両脇をしっかりと押さえつけ、その動きを安定させた。

「ここから出ないとー吸魂鬼がやってきます。マクネアが呼びにいきました」

ブラックは窓枠の両端に手をかけ、窓から頭と肩とを突き出した。

やせ細っていたのが幸いだった。

すぐさま、ブラックは片脚をバックピークの背中にかけ、ハーマイオニーの後ろに跨った。

「よーし、バックピーク、上昇！」ハリーは手綱を一振りした。

「塔の上までー行くぞ！」ヒッポグリフはその力強い翼を大きく羽ばたかせ、西の塔のてっぺんまで、三人は再び高々と舞い上がった。

バックピークは軽い爪音をたてて胸壁に囲まれた塔頂に降り立ち、ハリーとハーマイオニーはすぐさまその背中から滑り降りた。

「シリウス、もう行って。早く」息を切らしながらハリーが言った。

「みんなが間もなくフリットウィック先生の事務所にやってくる。あなたがいないことがわかってしまう」

バックピークは首を激しく振り、石の床に爪を立てて引っ掻いていた。

「もう一人の子は、ロンはどうした？」シリウスが急き込んで聞いた。

「大丈夫ーまだ気を失ったままです。でも、マダム・ボンフリーが、治してくださいって言いました。早くー行って！」しかし、ブラックはまだじっとハリーを見下ろしたままだった。

「なんと礼を言ったらいいのかー」

「行って！」ハリーとハーマイオニーが同時に叫んだ。

coming — Macnair's gone to get them.”

Black placed a hand on either side of the window frame and heaved his head and shoulders out of it. It was very lucky he was so thin. In seconds, he had managed to fling one leg over Buckbeak's back and pull himself onto the hippogriff behind Hermione.

“Okay, Buckbeak, up!” said Harry, shaking the rope. “Up to the tower — come on!”

The hippogriff gave one sweep of its mighty wings and they were soaring upward again, high as the top of the West Tower. Buckbeak landed with a clatter on the battlements, and Harry and Hermione slid off him at once.

“Sirius, you'd better go, quick,” Harry panted. “They'll reach Flitwick's office any moment, they'll find out you're gone.”

Buckbeak pawed the ground, tossing his sharp head.

“What happened to the other boy? Ron?” croaked Sirius.

“He's going to be okay. He's still out of it, but Madam Pomfrey says she'll be able to make him better. Quick — go —”

But Black was still staring down at Harry.

“How can I ever thank —”

“GO!” Harry and Hermione shouted together.

Black wheeled Buckbeak around, facing the open sky.

“We'll see each other again,” he said. “You

ブラックはバックピークを一回りさせ、空の方に向けた。

「また会おう」ブラックが言った。

「君は——ほんとうに、お父さんの子だ。ハリー……」

ブラックはバックピークのわき腹を踵で締めた。

巨大な両翼が再び振り上げられ、ハリーとハーマイオニーは飛び退いた……ヒッポグリフが飛期した……乗り手とともに、ヒッポグリフの姿がだんだん小さくなっていくのを、ハリーはじっと見送った……やがて雲が月にかかった……二人は行ってしまった。

are — truly your father's son, Harry. ...”

He squeezed Buckbeak's sides with his heels. Harry and Hermione jumped back as the enormous wings rose once more. ... The hippogriff took off into the air. ... He and his rider became smaller and smaller as Harry gazed after them ... then a cloud drifted across the moon. ... They were gone.